



学校教育目標 自ら学び 自ら考え 自ら行動する子を育てる

松林小だより



令和7年6月30日 第4号 茅ヶ崎市立松林小学校 校長 下反 達二

日かげ

「日かげ」

倉橋惣三

子どもにはいっぱいの日なたと共に、静かな日かげも与えてやりたい。

夏の日が強くなると、木の葉が繁って涼しいかげをつくってくれる。自然はなんというこまやかな心づかいと、やさしいいたわりに行き届いていることであろう。励ましと共にいたわりを忘れない。引き立てると共に憩わせることを忘れない。

日盛りの中を駆けまわって、その広い明るい光線に、ぐんぐんと活気をあおり立てられている子どもが、ふと、涼しい木かげに来て、にっこりと、なごやかな顔を見せることがある。

日なたがなければ子どもは生きない。しかしまた、日なたばかりでも子どもは生きられない。日なたに生き、日かげにかけられて生きる子どもでもある。

わたしたちも、子どものために、いっぱいの日なたとなると共に、よき日かげになってもやりたいものだ。

これは、「日本の幼児教育の父」と呼ばれ、大正から昭和にかけて活躍した教育家、倉橋惣三氏の執筆です。

「日なたがなければ子どもは生きない。しかしまた、日なたばかりでも子どもは生きられない。」という言葉は、非常に示唆に富んでいます。「日なた」は、活動や交流、発見といった外に向かうエネルギーを育む場でしょう。しかし、それだけでは子どもは疲弊してしまいます。内省したり、感情を整理したり、あるいはまた、ただぼんやりとすごしたりする時間、つまり「日かげ」が必要なのだと、倉橋は教えてくれます。この日かげは、「物理的な場所を指すだけではなく、精神的なゆとりや、だれにも邪魔されない時間、あるいは失敗や挫折を経験する中で得られる学びの場も意味しているのではないのでしょうか。」

そして、「わたしたちも、子どものために、いっぱいの日なたとなると共に、よき日かげになってもやりたいものだ。」と結ばれているように、大人は、子どもが思いっきり活動できる環境を整える「日なた」の役割を果たす一方で、時にはそっと見守り、寄り添い、時には失敗を優

しく包み込む「日かげ」のような存在であることが必要なのだと訴えます。子どもが自分のペースで、自分らしく居られる場所(学校)を創っていくことの重要性を、改めて考えさせられました。

そんな中……

リソースルームが「7年7組」という名称に

このたび、子どもたちの組織する代表委員会で、児童支援のためのリソースルームが「7年7組」という名称に決まりました。この名称にはあたたかなメッセージが込められているようです。

「7年7組」という言葉は実際には存在しない学年・学級であり、現実のクラスとは切り放された別の教室です。だからこそ、子どもたちは比較されない、安心できる空間としてこの部屋に入ることができます。学年の枠を超えて自分のペースで過ごせる特別な場そんな「もうひとつの教室」として7年7組は生まれました。



6年生考案のマーク

また、この名前を提案した6年のクラス代表の説明では、「7という数字にはラッキーセブンと呼ばれるようにポジティブで前向きなイメージがあるので」とのことです。子どもたちにとってこの教室がちょっと運が向いてくる場所、自分を取り戻せる場所になるといいですね。

子どもたちは、みな違った輝きをもっています。それぞれの持ち味を大切に、自分らしく安心して学べる環境を整えることが私たちの使命です。リソースルーム「7年7組」がその一助となるよう今後も丁寧に運営してまいりたいと思います。

学校花壇の苗植えありがとうございました。

先日は、PTA本部役員さんと保護者ボランティアの方が暑さで蒸し蒸しする中、学校花壇に素敵なお花をたくさん植えてくださいました。美しい環境は、子どもたちにも大人にとっても「やすらぎ」を与えています。感謝感謝でございます。本当にありがとうございました。

